

# 古典ナワトル語で学ぶ「抱合語」体験教室\*

佐々木 充文 (@Mitchara)

2010年6月5日 Twitter 自由言語大学 関東第1回勉強会 資料

## 1 はじめに

魔法の島を歩いてみよう 言語学の概説書には必ずといっていいほど登場する「抱合語」「複総合的言語」。たいていの本には「1つの語根が何十という接辞を伴って複雑な内容を伝える言語」「1つの語が1つの文のように機能する言語」などと解説されていますが、それが本当だとしたら、世の中にはなんとも不思議な言語があるものです。1つの文を1語で言える言語なんて、まるでおとぎ話のようではありませんか。

日本語で育ち、英語や中国語を学んできた人々は、そんな異邦の奇怪な言語の噂をときおり伝え聞いては、人間の言語の多様性にひとしきり驚嘆します。しかし、おとぎ話に聞いた魔法の島をこの目で見てやろうと思いつ人はそう多くないのが世の常です。すぐお隣にもアイヌ語という複総合的言語があるのですが…。

今回の発表は、そんなおとぎ話の魔法の島を自分の足で探検してみよう、というコンセプトで企画したものです。目的地は、「抱合語」の1つの典型として有名な古典ナワトル語。スペイン人征服者たちを黄金の夢に駆り立てたアステカ王国の言語は、はたして言語学にとっての黄金郷<sup>エルドラド</sup>でしょうか。

## 2 ナワトル語の紹介

ナワトル語 ナワトル語 (Nahuatl, el náhuatl) は、南ユート・アステカ語族アステカ語派のナワ諸語 (Nahuan, Aztecan, Southern Uto-Aztecan) に属する一群の方言です。主に現メキシコ国内で話されており、現在でも100万~150万人程度の話者がいるといわれていますが、方言によっては消滅の危機に瀕しています。

多様な方言が発達しており、Ethnologue<sup>\*1</sup>では現在28の方言を別々の言語として記載しています。また、SILの翻訳聖書は9種類の方言で出版されています。現代ナワトル語の多くの方言は古典ナワトル語の子孫ではなく、古典ナワトル語と同時期から各地で話されていた多様な方言が地域ごとに継承されてきたものです。

辞書や文法書はおもにスペイン語で出版されていますが、最近では英語の文献や論文も増えています。

古典ナワトル語 本発表が対象とする古典ナワトル語 (Classical Nahuatl, el náhuatl clásico) は、メキシコ植民地化前後 (16世紀前半) に現メキシコシティ周辺で話されていたナワトル語の一方言です。

アステカ王国の言語であり、当時メキシコ中央部で最も有力な言語であったため、植民地化直後から精力的

---

\* 本発表は「抱合語」・複総合的言語のひとつの典型として古典ナワトル語の文法を概観することを目的としており、「抱合語」・複総合的言語の通言語的な定義や特徴づけを目的としたものではありません。本発表で扱う事実や理論はあくまで古典ナワトル語についての言語個別的な記述です。複総合性や抱合の現れかたは言語によってさまざまであり、本発表の内容があてはまらない言語もあります。古典ナワトル語文法は主に次の資料によっていますが、大幅に簡略化しています: Andrews, Richard L. (2003) *Introduction to Classical Nahuatl: Revised Edition*. Oklahoma University Press.

<sup>\*1</sup> <http://www.ethnologue.com/>

に研究され、伝統文法が発達しています。また、ラテン文字で書かれた膨大なテキストが残っています。

古典ナワトル語のテキストや文法書は、言語学以外にも歴史学、アステカ研究、考古学、人類学、先住民運動などさまざまな分野で需要があるため、現在でも容易に入手できます。アメリカの先住民の言語としては例外的に学習環境の整った言語といえます。

### 3 古典ナワトル語の複総合性

複総合性とは 古典ナワトル語は複総合的言語 (polysynthetic language) であるといわれます。複総合的言語の定義は論者によって異なりますが、文字通り「1つの語に含まれる形態素の数の平均値が極めて大きい言語」と定義するのが一般的です。<sup>\*2 \*3</sup>

複総合的言語においては、ほかの言語でいくつもの語を組み合わせなければ表現できないような複雑な内容を1語で表すことができます。古典ナワトル語では、名詞が主語と所有者に、動詞が主語と目的語にそれぞれ一致し、1つの語があたかも1つの文(厳密には節)のようにふるまいます。また、ボイス交替(使役化など)、抱合といったプロセスにより、より複雑な内容を伝えることができます。

古典ナワトル語の複総合性の例 下の2例はいずれも1語ですが、文法的に要求されるさまざまな要素を全て含んでいるため、単独で1つの文として発話することができます。個々の接辞の意味や機能はひとまず無視して、接辞や接語の多さ<sup>\*4</sup>と、表している内容の完結性に注意してください。

(1) a. **Ahōninohtlahtōlhuelittac.**

b. **Ah-      ō-      ni-      no-      tla-      htō- l-      huel- itta**  
[否定] [完了] 私[主語] [再帰] [自動詞化] 言う[名詞化] よく 見る  
-c.  
[過去・主語単数]  
「私は自分の言葉が気に入らなかった」

(2) a. **Titopāccātlapīquiāyah.**

b. **ti-      to-      pāc- cā-      tla-      pīqu      -iā      -ya      -h**  
私たち[主語] [再帰] 幸せである[自動詞化] 作り出す[使役] [未完了] [主語複数]  
「私たちは幸せなふりをしていた」

<sup>\*2</sup> 1つの語に含まれる形態素の最大数を問題にするなら、たとえば日本語にも下のように複雑な構造をもつ語がみられます。

kaki-tor-ase-rare-mas-eN-des-ita-ka-ne

しかし、日本語は全体としてみると極端に総合性が高いとはいえないため、普通複総合的言語とは呼ばれません。また、古典ナワトル語では、日本語と違って膠着が義務的に起こる場合が多く、後述のように名詞や動詞が項の情報を含むことで単独の節として機能するため、日本語とは根本的に異なった文法現象がみられます。通常「複総合的言語」といえばナワトル語のような言語を指すのが一般的です。

<sup>\*3</sup> 「抱合語」は、統語的な抱合の自由度が高い(語を組み合わせる文を作るように自由に複合語を作ることができる)言語の古典的通称です。この言葉は、古典ナワトル語のような多重一致や抱合をもつタイプの複総合的言語を指す場合にしばしば用いられます。「抱合語」と「複総合的言語」とは別の概念であり、複総合的でありながら「抱合語」でない言語もあるため(グリーンランド語など)、「抱合語」はこのタイプの言語を指す名称としてはしばしば嫌われますが、本発表では、古典ナワトル語的な言語をさす通称として、あえて「抱合語」という名称を用いることにします。それは、「複総合的」という用語の定義がやや曖昧で、文字通りにとると通例「複総合的言語」に含まれないような言語まで「複総合的言語」に含まれてしまう場合があるためです。

<sup>\*4</sup> 厳密に分析すると形態素の数はもっと多くなります。

## 4 「1語=1文」とはどういうことか

### 4.1 「ウサギ」=「それは所有者不問のウサギである」

古典ナワトル語の文法の原理を理解するために、「ウサギ」という名詞 (*tōch*) を考えてみましょう。

古典ナワトル語では、*tōch* という語幹が単独で語として現れることはありません。

まず、名詞は所有者<sup>\*5</sup> に一致します。名詞は所有者接頭辞をとるほか、必ず所属形 (所有者情報あり) か独立形 (所有者情報なし) のどちらかの接尾辞をとります。

(3) a. **-notōch**

b. **-no- tōch -Ø**

私 [所有者] ウサギ [所属形]

「...私のウサギ」

(4) a. **-motōch**

b. **-mo- tōch -Ø**

あなた [所有者] ウサギ [所属形]

「...あなたのウサギ」

(5) a. **-tōchtli**

b. **-Ø- tōch -tli**

[ゼロ所有者] ウサギ [独立形]

「... (所有者不問の) ウサギ」

しかも、恐ろしいことに、上の (3)-(5) は語としてはまだ不完全です。名詞は主語の人称と数にも一致するので、次の (6)-(8) のような形になってはじめて語として独立します。

(6) a. **nimotōch**

b. **ni- mo- tōch -Ø**

私 [主語] あなた [所有者] ウサギ [所属形]

「私はあなたのウサギだ」

(7) a. **motōch**

b. **Ø- mo- tōch -Ø**

それ [主語] あなた [所有者] ウサギ [所属形]

「それはあなたのウサギだ」

(8) a. **nitōchtli**

b. **ni- Ø- tōch -tli**

私 [主語] [ゼロ所有者] ウサギ [独立形]

<sup>\*5</sup> ここでいう「主語」「目的語」「所有者」とは、文全体の主語・目的語名詞節や句全体にかかる所有者名詞節 (supplementary subject/object/possessor) ではなく、中核節のもつ形態統語的情報としての主語・目的語・所有者です。以下「主語」「目的語」「所有者」という用語は主にこの意味で用います。

「私は（所有者不問の）ウサギだ」

つまり、名詞が独立した語として現れるには、「 は のウサギだ」という同定文的な節を形成する必要があります。このように名詞語幹が主語と所有者に一致して語として現れることができるようになったものを名詞節（**nominal nuclear clause**）と呼びます。名詞節は、単独で1文（同定文）をなすことができる自己完結的な節です。古典ナワトル語では、(6)–(8)は単独で完全な文になります。

*tōch* という名詞は、決してそのまま *tōch* という形で現れることはありません。ナワトル語辞書では *tōchtli* のような形が見出し語になっており、“rabbit” “conejo” などと訳してありますが、これはあくまで便宜的なものです。*tōchtli* という形は、厳密には三人称単数主語とゼロ所有者に一致した1つの名詞節です。形態統語的情報を含めて直訳すれば「それは（所有者不問の）ウサギである」となります。

## 4.2 名詞節の一致パラダイム（部分）

名詞節の構造 古典ナワトル語では、名詞は主語人称接頭辞、所有者接頭辞、主語数・所属／独立形接尾辞の3つの接辞を伴って名詞節を形成します。

[主語人称] + [所有者] + 【語幹】 + [主語数・所属／独立形]

上の図式から分かるように、名詞節は主語人称・所有者・主語数・所属／独立の情報を含んでいます。

主語数・所属／独立形接尾辞は、主語の数の情報と所属形／独立形（所有者情報の有無）の情報を含んだカバン接尾辞です。語幹の単数性・複数性ではなく、主語の人称に対応して形を変えます。

先述のとおり、古典ナワトル語の名詞節は「 は の...である」という同定文的な構造をもっています。名詞節を構成する要素のうち、主語人称部分と主語数部分を主語部、所有者部分と語幹と所属／独立形部分を述語部と呼ぶとすれば、名詞節は主語部が述語部をはさみこむ形になっていると考えられます。

主語部 [主語人称] + ..... + [主語数]  
述語部 ..... + [所有者] + 【語幹】 + [所属／独立形] + .....

ここで、規則形の名詞節の一致パラダイムを見てみましょう。<sup>\*6 \*7</sup>

主語人称接辞のパラダイム 主語人称接頭辞のパラダイムは下のとおりです。

	単数	複数
一人称	<i>n(i)-</i>	<i>t(i)-</i>
二人称	<i>t(i)-</i>	<i>am-</i>
三人称	<i>∅-</i>	<i>∅-</i>

*n(i)-*・*t(i)-*の*i*は母音の前で脱落します。二人称単数と一人称複数、三人称単数と三人称複数がそれぞれ同形ですが、後述する主語数・所属／独立形接尾辞が単数と複数で異なる形をとるので、混同はありません。

三人称主語接辞は単数主語・複数主語ともに *∅-* です。これは古典ナワトル語に限らず、複総合的とされる言語の多くが共有している特徴です。

<sup>\*6</sup> 語幹が重複（reduplication）を起こしたり不規則な所属形をとったりする名詞もありますが、ここでは扱いません。

<sup>\*7</sup> 古典ナワトル語では、単数・複数の区別があるのは有生（animate）の名詞に限られます。無生（inanimate）の名詞は有生単数と同様に扱われます。以下、有生単数と無生を合わせて「単数」、有生複数を「複数」と呼びます。

所有者接辞のパラダイム 所有者接辞のパラダイムは下のとおりです。

	単数	複数
一人称	<i>n(o)-</i>	<i>m(o)-</i>
二人称	<i>t(o)-</i>	<i>am(o)-</i>
三人称	<i>ī-</i>	<i>īm-</i>
不定(人)		<i>tē-</i>
不定(もの)		<i>tla-</i>
ゼロ所有者(独立形)		<i>∅-</i>

*n(o)-*・*m(o)-*・*t(o)-*・*am(o)-* の *o* は母音の前で脱落します。不定所有者接辞 *tē-*・*tla-* はそれぞれ「誰かの...」「何かの...」を表すのに用いられます。

主語数・所属/独立形接辞のパラダイム 先述のとおり、主語数・所属/独立形接尾辞は、主語の数の情報と所属/独立形の情報を含んだカバン接尾辞です。複数の異形態があり、どの名詞がどの形をとるかは語彙的に決まっています。単数・複数の区別が主語の数に対応するものであることに注意してください。

	主語単数	主語複数
独立形	<i>-tl(i)</i> , <i>-in</i> , <i>-∅</i>	<i>-meh</i> , <i>-tīn</i> , <i>-h</i>
所属形	<i>-uh</i> , <i>-∅</i>	<i>-huān</i>

独立形単数主語の接辞 *-tl(i)* は母音の後で *-tl*、/l/以外の子音の後で *-tli*、/l/の後で *-li* という形をとります。<sup>\*8</sup> 独立形については、どの名詞がどの接辞をとるかは語彙的に決まっています。

所属形単数主語の接辞は、母音で終わる語幹では *-uh*、子音で終わる語幹では *-∅* となるのが一般的です。<sup>\*9</sup> このほか不規則な所属形をもつ名詞もありますが、省略します。

名詞節を作ってみよう それでは実際に名詞節を作ってみましょう。まず名詞語幹 *mēxihca-* 「アステカ人」を独立形で活用してみます。*mēxihca-* の独立形は *mēxihca-tl* (単数主語)・*mēxihca-h* (複数主語) です。

(9) **Nimēxihcatl.**

「私はアステカ人だ」

(10) **Timēxihcatl.**

「あなたはアステカ人だ」

(11) **Mēxihcatl.**

「彼/彼女はアステカ人だ」

(12) **Timēxihcah.**

「私たちはアステカ人だ」

<sup>\*8</sup> 言語名「ナワトル」(*nāhuatl*, *nāhuatlahtōlli*)をはじめ、ナワトル語起源の言葉に「トル」や「トリ」で終わる言葉が多いのはこの接辞のためです。*-tl* はスペイン語に入って *-te* になりました。*chocolate* < *chocolātl*、*tomate* < (*xī*)*tomatl*、*coyote* < *coyōtl* など。

<sup>\*9</sup> 子音の後で *-hui* という形もありますが、例が少ないので省略します。

(13) **Ammēihcah.**

「あなたがたはアステカ人だ」

(14) **Mēihcah.**

「彼らはアステカ人だ」

次に所属形の活用をしてみましょう。名詞語幹 *oquich-*「男・夫」を所属形で活用してみます。*oquich-*の所属形は *-oquich-∅*<sup>\*10</sup>（単数主語）・*-oquich-huān*（複数主語）です。

(15) **Nimoquich.** < *n(i)-m(o)-oquich-∅*

「私はあなたの夫だ」

(16) **Noquich.** < *∅-n(o)-oquich-∅*

「彼は私の夫だ」

(17) **Antoquichhuān.** < *am-t(o)-oquich-huān*

「あなたがたは私たちの夫だ」

(18) **Amoquichhuān.** < *∅-am(o)-oquich-huān.*

「彼らはあなたがたの夫だ」

(19) **Īoquich.** < *∅-ī-oquich-∅*

「彼は彼女の夫だ」

(20) **Īmoquichhuān.** < *∅-īm-oquich-huān.*

「彼らは彼女らの夫だ」

### 4.3 動詞節の一致パラダイム（部分）

**動詞節の構造** 次は動詞の一致パラダイムを見てみましょう。古典ナワトル語では、動詞は主語人称接頭辞、目的語接頭辞（他動詞の場合のみ）、主語数接尾辞の3つの接辞を伴って動詞節（**verbal nuclear clause**）を形成します。名詞節と同様に、動詞節も単独で文として成立する自己完結的な節です。名詞節が同定文的な内容を表すのに対し、動詞節は「が（を）...する」という動詞文的な構造を持っています。図式化すると下のようになります。

[ 主語人称 ] + [ 目的語 ] ( 0 ~ 複数個 ) + 【 語幹 + 時制 】 + [ 主語数 ]

目的語接辞の数は動詞語幹の性質によって決まります。自動詞は目的語接辞を要求せず、典型的な他動詞節は目的語接辞を1つ要求します。使役形、充当形（*applicative*）<sup>\*11</sup>などボイス交替に関わる形では目的語接辞が増減する場合があります。抱合によっても目的語接辞が減ることがあります。また、*maca*「与える」のように語根レベルで目的語接辞を2つ要求する動詞もあります。

先の名詞節の分析にならって、主語人称部分と主語数部分を主語部、目的語部分と語幹（+時制）を述語部と呼ぶとすれば、動詞節も名詞節と同様のサンドイッチ構造を持っていると考えられます。

<sup>\*10</sup> *-oquich-hui* という形もあります。

<sup>\*11</sup> 「適用形」という訳もありますが、原語のまま用いることも多い用語です。

主語部 [主語人称] + ..... + [主語数]  
 述語部 ..... + [目的語] + 【語幹 + 時制】 + .....

今回は厄介なボイス交替は省略し、語幹交替も形態音韻論的交替も起こらない動詞を選んで、直説法の現在形と過去形に活用してみましょう。このタイプの動詞では、語幹に接辞をくっつけるだけで動詞節が完成します。まず動詞節を形成する接辞を見てみることにします。

主語人称接辞のパラダイム 主語人称接頭辞のパラダイムは基本的に名詞節と同じ<sup>\*12</sup>です。

	単数	複数
一人称	<i>n(i)-</i>	<i>t(i)-</i>
二人称	<i>t(i)-</i>	<i>am-</i>
三人称	<i>∅-</i>	<i>∅-</i>

目的語接辞のパラダイム 目的語接辞のパラダイムは下のとおりです。<sup>\*13</sup>

	非再帰形		再帰形	
	単数	複数	単数	複数
一人称	<i>nēch-</i>	<i>mitz-</i>	再帰一人称	<i>n(o)- t(o)-</i>
二人称	<i>tēch-</i>	<i>amēch-</i>	再帰二人称	<i>m(o)- m(o)-</i>
三人称	<i>qu(i)-</i>	<i>quim-</i>	再帰三人称	<i>m(o)- m(o)-</i>
不定(人)		<i>tē-</i>		
不定(もの)		<i>tla-</i>		

三人称単数非再帰形目的語接辞の *qu(i)-* に現れる *i* は音節初頭の子音連続を避けるための補助母音です。<sup>\*14</sup>

主語数接辞のパラダイム 語幹交替が起こらない動詞<sup>\*15</sup>の直説法現在と直説法過去の動詞節の主語数接尾辞のパラダイムは下のとおりです。

	単数	複数
直説法現在	<i>-∅</i>	<i>-h</i>
直説法過去	<i>-c</i>	<i>-queh</i>

動詞節を作ってみよう 材料はそろいました。語幹交替の起こらない規則動詞の直説法現在形と直説法過去形を作ってみましょう。

ここでは、自動詞の例として *cuīca* 「歌う」、他動詞の例として *tlazohtla* 「... (人) を愛する」と *cui* 「... を取る」を挙げ、それぞれ完全な動詞節を作ってみることにします。また、再帰形の用法の例として *chihua* 「作る」を挙げます(この動詞は語幹交替が起こるので、ここでは現在形のみ示します)。

過去形の動詞には頭にしばしば完了を表す接語 *ō-* が付加されます。

<sup>\*12</sup> ただし、希求法(optative)においては二人称単数・複数の主語接辞が *x(i)-* になります。

<sup>\*13</sup> このほか、ボイス交替や動詞の名詞化に伴って現れる *ne-* という特殊な再帰形目的語接辞があります。

<sup>\*14</sup> ただし、接語は無視されます。例: *Ō-qui-tocac*. 「彼/彼女<sub>A</sub>は彼/彼女<sub>B</sub>を追った」: *\*Ōtocac*.

<sup>\*15</sup> Andrewsはこのタイプの動詞を「Class A verbs」と呼んでいます。

*cuīca* 「歌う」:

(21) **Cuīca.** <  $\emptyset$ -*cuīca*- $\emptyset$

「彼は歌っている」

(22) **Ancuīcah.** < *am-cuīca-h*

「あなたがたは歌っている」

(23) **Ōnicuīcac.** <  $\bar{o}$ -*n(i)-cuīca-c*

「私は歌った」

(24) **Ōcuīcaqueh.** <  $\bar{o}$ - $\emptyset$ -*cuīca-queh*

「彼らは歌った」

*tlazohtla* 「... (人) を愛する」:

(25) **Nictlazohtla.** < *n(i)-qu(i)-tlazohtla- $\emptyset$*

「私は彼 / 彼女を愛している」

(26) **Quitlazohtlah.** <  $\emptyset$ -*qu(i)-tlazohtla-h*

「彼らは彼 / 彼女を愛している」

(27) **Titētlazohtlah.** < *t(i)-tē-tlazohtla-h*

「私たちは人を愛している」

(28) **Motlazohtlah.** <  $\emptyset$ -*m(o)-tlazohtla-h*

「彼らは自分たちを愛している」

(29) **Ōnamēchtlazohtlac.** <  $\bar{o}$ -*n(i)-amēch-tlazohtla-c*

「私はあなたがたを愛した」

(30) **Ōtitotlazohtlaqueh.** <  $\bar{o}$ -*t(i)-t(o)-tlazohtla-queh*

「私たちは自分たちを愛した」

*cui* 「...を取る」:

(31) **Quicui.** <  $\emptyset$ -*qu(i)-cui- $\emptyset$*

「彼 / 彼女はそれを取っている」

(32) **Anquicuih.** < *am-qu(i)-cui-h*

「あなたがたはそれを取っている」

(33) **Ōniccuic.** <  $\bar{o}$ -*n(i)-qu(i)-cui-c*

「私はそれを取った」

(34) **Ōtitlacuiqueh.** <  $\bar{o}$ -*t(i)-tla-cui-queh*

「私たちはものを取った」



*chihua* 「...を作る」:

(35) **Ticchihua**. < *t(i)-qu(i)-chihua-Ø*

「あなたはそれを作っている」

(36) **Mochihua**. < *Ø-m(o)-chihua-Ø*

「それは生じている」

#### 4.4 名詞節・動詞節のまとめ

ここまで、古典ナワトル語における複総合性の特徴をつかむために、名詞節・動詞節の構造と機能を概観しました。ここで、今までに見た事実を確認しましょう。

まず、名詞は主語と所有者に一致して名詞節を、動詞は主語と目的語に一致して動詞節を形成します。名詞節と動詞節はそれぞれ自己完結的な節としてふるまい、単独で文をなすことができます。この場合、名詞節は同定文的な内容を、動詞節は動詞文的な内容を伝えます。名詞節と動詞節を総称して中核節 (**nuclear clause**) と呼びます。

古典ナワトル語の中核節は、上にみたような単純な一致のほか、複雑なボイス交替や複合・派生によってより複雑な情報を含むことができます。いずれにせよ、古典ナワトル語の中核節はどんな場合でも文に必要な情報を全て含んでいます。言い換えれば、古典ナワトル語の名詞や動詞は、文に必要な要素を全て含まないがざり語として独立できません。この意味で、古典ナワトル語では「1つの語が1つの文として機能する」といわれるのです。

## 5 古典ナワトル語の統語論

### 5.1 「1語=1文」の限界

古典ナワトル語では、一致によって表される情報は人称と数のみでした。したがって、一致で表すことができるのは、英語でいえば人称代名詞にあたる「私」「あなた」「それ」などの要素に限られます。では、古典ナワトル語の動詞文には、「私」や「あなた」以外の名詞は登場しないのでしょうか。また、古典ナワトル語で1文が1語で成立してしまうとすれば、古典ナワトル語には2語以上からなる文は存在しないのでしょうか。古典ナワトル語に統語論は存在しないのでしょうか。

### 5.2 補足

補足とは あらゆる自然言語がそうであるように、古典ナワトル語にも当然統語論は存在します。テキストをみると、10以上の語からなる長い文も頻繁に登場します。しばしば誤解されますが、古典ナワトル語には「語と文の区別がない」わけではありません。古典ナワトル語の統語論において中心的な役割を果たしているのが補足 (**supplementation**) という統語的手段です。

補足とは、中核節に接辞として付加されている人称代名詞(主語、目的語、所有者)を「補う」形で別の中核節が付加されることです。<sup>\*16</sup>例を見てみましょう。

<sup>\*16</sup> 古典ナワトル語の補足は、形態統語的な一致現象ではなく、照応現象の一種です。このような代名詞とそれ以外の要素との間の指示対象の共有による統語的な結びつきをクロスリファレンス (**cross-reference**) と呼ぶことがあります。

(37) **Ōniccac**            **īcuīcauh.**

私はそれを聞いた それは彼 / 彼女の歌だ

「私は彼 / 彼女の歌を聞いた」

上の例では、主要な中核節である *ōniccac* 「私はそれを聞いた」の目的語接辞「それ」*c- < qu(i)-*を補足する形で別の名詞節 *īcuīcauh* 「それは彼の歌だ」が付加されています。後者が前者の内容を補っているため、この文は全体として「私は彼の歌を聞いた」という意味になります。

次の例では、動詞節の主語と目的語の両方に補足が起っています。

(38) **Timēxihcah**            **tamēchnāmiquizqueh**            **amotomih.**

私たちはアステカ人だ 私たちはあなたがたに会うだろう あなたがたはオトミ人だ

「私たちアステカ人は、あなたがたオトミ人に会うだろう」

この例では、主要な動詞節 *amotomih* 「私たちはあなた方に会うだろう」の主語部「私たち」*t(i)- ... -h*と目的語接辞「あなたがた」*amēch-*について、それぞれ対応する名詞節が付加されています。

補足は名詞節の主語・所有者についても起こります。

(39) **Nocihuāuh**    **ītōcā**                    **María.**

彼女は私の妻だ それは彼女の名前だ それはマリアだ

「私の妻の名前はマリアだ」

上の例はやや複雑ですが、まず動詞節 *ītōcā* 「それは彼女の名前だ」の所有者「彼女」*i-*に対応して *nocihuāuh* 「彼女は私の妻だ」が付加され、「それは私の妻の名前だ」を意味する句をなします。この句がさらに文の主要な節 *María* 「それはマリアだ」の主語部「それ」*Ø- ... -Ø*を補足しています。

補足される節は名詞節に限りません。動詞節も同様に補足節になります。

(40) **Nicnequi**            **in**            **quimonequiltia**            **Dios.**

私はそれを望む [小辞] 彼はそれをお望みになる 彼は神だ

「私は神がお望みになるものを望む」

この文の中心となるのは動詞節 *nicnequi* 「私はそれを欲する」です。この動詞節の目的語を補う形で *quimonequiltia* 「彼はそれをお望みになる」という句が付加されます。

このような動詞節の補足節は、英語やスペイン語では関係節で訳されることが多いため、関係節の一種と解釈されることがあります。この分析の適否について結論を出すことはできませんが、古典ナワトル語文法の中だけで議論すれば、名詞節による補足と動詞節による補足は全く並行的な現象です。これを関係節と考えるなら、古典ナワトル語の補足現象は全て関係節化の一種であるといえるかもしれません。

### 5.3 「中核節 + 補足」の原理

古典ナワトル語文法の特徴 まとめ すでに見たとおり、古典ナワトル語の名詞や動詞は自己完結的な中核節をなし、中核節は補足という統語手段によって結びついてより長い文を構成します。古典ナワトル語文法の特徴は、単なる複総合性（1つの語に含まれる形態素の数が多いこと）ではとらえられません。文として必要な情報を全て含んだ中核節の独立性と、指示対象の共有による中核節どうしの結合のゆるやかさが、古典ナワトル語の際立った特徴であるといえます。

日本語や英語においては、動詞や名詞の語幹は項との完全な一致なしに語として独立することができますが、語は基本的には単独で文を作ることができず、文中のほかの要素と相互に依存しています。これに対し、古典ナワトル語では動詞や名詞は完全な一致なしに語として独立することはできませんが、語（中核節）の独立性は高く、単独で文を作ることができます。中核節どうしは補足によって結びつくので、その結びつきは日本語や英語の語どうしの結合に比べると緩やかであると考えられます。

	日本語・英語	古典ナワトル語
語幹の独立性	高	低
語の独立性	低	高
語の内容	節の一部分	完結的な節
統語の基本的な手段	相互依存	補足

並置 古典ナワトル語のこうした性質をみごとに反映した現象に並置があります。古典ナワトル語においては、複数の中核節を並列的に用いた文が頻出します。

- (41) **Mā īxpantzinco ximopēpetlāhua ximomamaxahui in**  
 [小辞] それは彼のみまえだ あなたは服を脱ぎなさい あなたは裸になりなさい [小辞]  
**tloqueh nāhuaqueh in totēucyō in yohualli in ehecatl.**  
 彼は偏在する神だ [小辞] 彼は私たちの主だ [小辞] それは夜だ [小辞] 彼は風だ  
 「偏在する神、私たちの主、夜の風（神の呼び名）のみまえでは、あなたは服を脱ぎ、裸になりなさい」

上の例では、*ximopēpetlāhua*「あなたは服を脱ぎなさい」と*ximomamaxahui*「あなたは裸になりなさい」が並置されています。また、(*in*) *tloqueh nāhuaqueh*「彼は偏在する神だ」、(*in*) *totēucyō*「彼は私たちの主だ」、(*in*) *yohualli* (*in*) *ehecatl*「彼は夜の風だ」の3つも並列的に用いられています。

このように、並置は古典ナワトル語のテキストでは非常に頻繁に起こり、この言語の重要な文体的特徴をなしています。英語の *and* や *or* にあたる接続のマーカ―を用いる必要はありません。

古典ナワトル語における並置の自由さは、中核節と補足を中心とする古典ナワトル語文法の性質に由来すると考えられます。中核節どうしの結びつきは一種の照応（指示対象共有）現象であるため、人称接辞によって表される指示対象さえ同じなら、中核節をいくつでも結びつけることができます。

#### 5.4 「中核節 + 補足」で見落とされるもの

「続きは文脈で」の罫 今まで見てきた事実は古典ナワトル語文法の形式的な原理にあたる部分、いわばもっとも「堅い」部分です。古典ナワトル語の文法書や学習書で扱っているのは主にこの部分で、分厚い本をいくらひっくり返してもこれ以上のことは載っていません。では、こうした「堅い」文法の原理を学ぶだけで、本当に古典ナワトル語を理解したことになるのでしょうか。

古典ナワトル語は、自己完結的な中核節を補足によってゆるやかに結合することで文を構成する言語でした。したがって、語順の自由度が高く、中核節どうしの関係や階層構造をマークする機能的要素があまり発達していません。この性質から、古典ナワトル語の次のような特徴が帰結します。

1. ある中核節が文の中核をなすかどうかは文脈によって判断しなければならない。
2. 文の階層構造は文脈によって判断しなければならない。
3. 中核節の文中での機能は文脈によって判断しなければならない。

(42) **Niquittac**                      **ical.**

私は彼 / 彼女 / それを見た それは彼 / 彼女の家だ

上の文は、ふつつ「私は彼 / 彼女の家を見た」と訳されます。これは中核節 *niquittac* 「私はそれを見た」を文の中心にすえ、*ical* 「それは彼 / 彼女の家だ」を補足節と解釈した結果です。

では、代わりに *ical* を文の中心と考えるとどうなるでしょうか。この場合、「私が見たのは彼の家だ」という語用論的に自然な解釈もありえますが、*niquittac* 「私は彼 / 彼女 / それを見た」が人を先行詞とする関係節をなすと解釈することもできるので、この文は「それは [私が見た人] の家だ」という意味にもなりえます。現在分かっているかぎりでは、この解釈を禁止するルールはありません。

すでに挙げた文の中にも、解釈によって意味が変わってしまうものがあります。(40) の例を再掲します。

(43) **Nicnequi**            **in**            **quimonequiltia**            **Dios.**

私はそれを望む [小辞] 彼はそれをお望みになる 彼は神だ

この文は通常「私は神がお望みになるものを望む」と訳されますが、*quimonequiltia* を文の中心と考え、*Dios* をその主語に対応する補足節と考えれば、「神は私の望むものをお望みになる」とも解釈できます。<sup>\*17</sup>

このように、「中核節 + 補足」という原理だけで説明しようとする、古典ナワトル語文法はなんでもあり (overgenerative) になってしまうのです。文法書では、上のような「自然でない」解釈は「文脈によって」排除されると説明(?)されていますが、語用論的に必ずしも排除されない解釈もあることから、文の解釈にはある程度まで統語的要素や談話的要素も関与していると考えられます。しかし、その条件や原理についてはほとんど何も分かっていません。テキストをみると、主題や焦点にあたる中核節が前に出やすいと考えられますが、どのような場合に主題が前置され、どのような場合に焦点にあたる中核節が前置されるのかも不明です。

予測的代名詞 このほか、「中核節 + 補足」の原理だけではとらえられない現象のひとつに予測的代名詞の使用があります。予測的代名詞とは、本来の項より前に現れ、中核節の項を前もって冗語的に表示しているように見える形式的な代名詞のことです。

(44) **Ca**            **huel yehhuātl**                      **in**            **tōnacāyōtl.**

[小辞] まさにそれは存在するものだ [小辞] それは栄養物だ  
「まさにそれが栄養物だ」

(45) **Nehhuātl**            **aīc**            **ōnimitzcocolih**            **auh in**            **neh**

私は存在するものだ 一度も...ない私はあなたを憎んだ そして [小辞] 私は存在するものだ  
**tehhuātl**                      **mochipa tinēhcocolia.**  
あなたは存在するものだ いつも あなたは私を憎む  
「私はあなたを一度も憎んだことがないのに、あなたは私をいつも憎んでいる」

これらの例に出てくる *yehhuātl*、*nehhuātl*、*neh*、*tehhuātl* のような形は独立形人称代名詞と呼ばれるもので、内容をもたない名詞 (*yehhuā-* や *yeh-* が主語に一致した名詞節です。直訳すれば「それは存在するものだ」「私は存在するものだ」となりますが、実際には独立形人称代名詞は文字通り人称代名詞の独立形 (名詞節の形をとった人称代名詞) のような役割を果たします。

<sup>\*17</sup> *nicnequi* を文の中心とし、*Dios* を *quimonequiltia* の目的語に対応する補足節と考えれば、「私は彼が神をお望みになることを望む」と読むこともできそうですが、動詞節が動詞 *nequi* 「欲する」の目的語補足節になる場合、動詞節は未来形 (*quimonequiltiāz*) でなければならないので、この解釈は明確に排除されます。

予測的代名詞は、語順の自由度が高い古典ナワトル語においては珍しいことに、原則として補足される中核節よりも前に現れます。予測的代名詞は典型的な中核節に比べれば独立性が低く、ある種の機能語的な役割を果たしていると考えられますが、具体的なことは分かっていません。

「堅い」文法の外に何があるのか 「中核節 + 補足」を基本原理とする古典ナワトル語の「堅い」文法は、語の性質や語どうしの結びつきといった純粹に形式的な現象を説明する道具としては非常に有効ですが、一方で基本的な文法現象を説明できないことも多く、文の立体的な構造や意味を説明する手段としては不十分といわざるをえません。

「堅い」文法の外にある統語現象を的確にとらえ、それを適切なレベルで分析できてはじめて、古典ナワトル語の包括的な文法記述が可能になります。しかし、実際にどのような現象が起こっているのか、それをどのレベルで分析すればいいのか、確かなことは何も分かっていません。一見研究されつくしたかのように見える古典ナワトル語ですが、その意味では文法記述の糸口さえつかめていないのです。

## 6 メモ: 古典ナワトル語で言語学を(もっと)面白くしよう!

この世に分析して面白くない言語など存在しないように、研究して一般言語学に資するところのない言語は1つもありません。発表を終えるにあたって、古典ナワトル語研究の一般言語学への貢献の可能性について示唆しておきたいと思います。

形態論 古典ナワトル語では、語(中核節)はそれ自体が主語と述語をもつ自己完結的な節であり、人称接辞は一致のマーカというよりは人称代名詞そのもののように見えます。この意味で、古典ナワトル語における「語」や「一致」は、英語のような言語における「語」「一致」とはかなり性質を異にしています。それでは、そもそも語とはなんのでしょうか。一致とはなんのでしょうか。その通言語的定義は可能でしょうか。

統語論・意味論 形式的な統語理論では、古典ナワトル語のような言語をどのように分析できるのでしょうか。中核節を英語や日本語における語のように堅固な統語構造の一部として扱うことはできるのでしょうか。もし不可能であれば、古典ナワトル語を分析するために、どのような理論的道具を用意すればよいのでしょうか。「中核節 + 補足」タイプの言語である古典ナワトル語では、どのような形式意味論が可能でしょうか。

また、先ほど触れたように、「中核節 + 補足」の原理に従う古典ナワトル語においても、ところどころで独立性の低い機能語的な要素が発達しています。これらの要素はどのような統語的(または機能的・談話的)要請から生まれたものでしょうか。それはほかの言語においてはどのように働いているのでしょうか。

言語類型論 たとえば、古典的な語順の類型論(SVO、SOV...など)において、古典ナワトル語はどのような位置を占めるのでしょうか。文の「主語」とは統語的な主語(文の中心になる中核節の主語部に対応する補足節)を指すのでしょうか、それとも個々の名詞節や動詞節の主語人称接辞を指すのでしょうか。古典ナワトル語の補足節を日本語や英語の主語と同様に扱ってもよいのでしょうか。古典ナワトル語の文法を研究することで、類型論的一般化の前提を問い直すことができます。

また、複総合的言語の類型論については多くの先行研究がありますが、まだ決定的な成果は出ていません。古典ナワトル語の文法特徴はほかの複総合的言語にもあてはまるのでしょうか。古典ナワトル語タイプの言語を特徴づける数々の文法的性質を類型論的に一般化することは可能でしょうか。

## 7 おわりに

ナワトル語に挑戦しよう 古典ナワトル語は、アメリカ先住民の言語としては例外的に学習環境が整った言語です。メキシコでは、先住民運動の影響もあり、スペイン語を母語としながらナワトル語を学んでいる人がたくさんいます。ナワトル語版 Wikipedia ( Huiquipedia ) も作られているほか<sup>\*18</sup>、Twitter でもときおりナワトル語を聞くことができます。ヘイル ( Kenneth L. Hale ) やラネカー ( Ronald W. Langacker ) も一時期学んでいたナワトル語、この機会に挑戦してみませんか。

Amazon.com で買えるおすすめ古典ナワトル語教材

文法書 Andrews, Richard L. (2003) *Introduction to Classical Nahuatl: Revised Edition*. Oklahoma University Press. 伝統文法ではなく現代言語学の枠組みで書かれた貴重な古典ナワトル語の文法書。

問題集 Andrews, Richard L. (2003) *Workbook for Introduction to Classical Nahuatl: Revised Edition*. Oklahoma University Press. 上記文法書の各章に対応した文法問題集。

辞書 Karttunen, Frances (1992) *An Analytical Dictionary of Nahuatl*. Oklahoma University Press. 通常の辞書には十分に記されていない母音の長短や母音間の半母音の有無までほぼ正確に記載されている辞書。

散文テキスト Anderson, Arthur J.O. and Dibble, Charles E., Trans. (1953–1981) *Florentine Codex: General History of the Things of New Spain: Book 1–12*. The School of American Research and The University of Utah. 16世紀に宣教師サアグン ( Bernardino de Sahagún が ) 編んだナ西対訳の民族誌『ヌエバ・エスパーニャ諸事物概説』 ( *Historia general de las cosas de la Nueva España* )、通称『フィレンツェ絵文書』 ( *Códice Florentino* ) のナ英版。神話や儀式から人々の生活、動植物や鉱物の知識、伝承や歴史まで網羅したアステカ学の基本文献。巻によっては入手がやや面倒な場合も。

韻文テキスト Brinton, Daniel G. (1890) *Ancient Nahuatl Poetry, Containing the Nahuatl Text of Xxvii Ancient Mexican Poems*. Reprinted in 2006. The Echo Library. アステカ歌謡のナ英対訳テキスト。

---

<sup>\*18</sup> <http://nah.wikipedia.org/>